文化芸術交流

Arts and Cultural Exchange

日本文化を世界へ向けて発信！

文化人や芸術家にとどまらない市民レベルをも含めた人物交流に加え
造形美術、舞台芸術、映像メディア、出版など広い分野において
日本文化を世界中に紹介しています。
文化の担い手の多様化を反映したその活動は
伝統芸術から現代アートまで実に多岐にわたり
国境を越えた深い文化理解や真の国際交流として結実しています。

書道展が切手に～ヨルダン～

ヨルダンの郵政公社であるヨルダン・ポストは2007年に、両国の友好関係の益々の発展を願って、日本にまつわる3種類の切手と1種類の台紙を発行しました。このうち1種類の切手は2004年11月に両国の外交関係樹立50周年を記念してアンマン市内で行われた書道展（ジャパンファウンデーションが助成を行い、デモンストレーションやワークショップも行われました）の写真を使ったデザインです。日本と同様、長い書道の伝統を持つアラビアで、沢山の人が葉書や封筒の上に日本の伝統文化を見出すことでしょう。

第10回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展

藤森建築と路上観察学会
高い評価を獲得した、ユニークな展示とそのテーマ

世界的な建築展で日本文化を紹介

第10回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展が2006年9月10日から11月18日まで開催され、日本館では藤森照信氏をコミッショナーに迎え、「藤森建築と路上観察――誰も知らない日本の建築と都市」と題して、海外ではまだあまり知られていない藤森建築ならびに路上観察学会の活動を紹介しました（出品作家は藤森氏自身の他、赤瀬川原平、南伸坊、松田哲夫、林丈二、杉浦日向子（故人）各氏の計6名）。

藤森氏は、日本の近代建築の研究で知られる建築史家・建築家。路上観察学会とは、同氏および他の出品作家を中心メンバーとする、都市における無意識の造形を36年にわたって採集・鑑賞している団体です。

さまざまな感覚を刺激する展示

真っ黒に焼かれた杉壁に開けられた小さな入り口。日本館に入った観客は、ここで靴を脱いで腰をかがめて展示スペースへと進みます。床には籐ゴザが敷きつめられ、中央には竹と荒縄で編まれたドーム「路上シアター」。スペース内には籐の香りが立ち込めています。来館者は、壁に沿って展示された「高過庵」「タンポポハウス」など藤森建築の写真や配置された模型を思い思いに眺め、「路上シアター」では同学会が採集した珍妙でユーモアあふれる物件のスライドショーを寝そべりながら鑑賞しつつ、それらのユニークさを視覚以外にもさまざまな感覚を通して「味わう」ことになります。

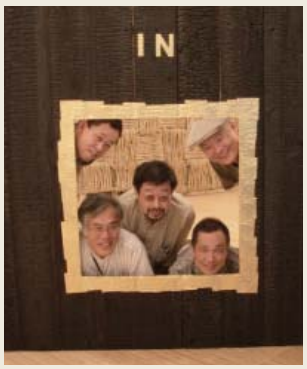
展示会の今回の総合テーマは「都市。建築と社会」であり、正面から都市問題を扱った展示館が多いなか、この日本館は明らかに異彩を放つ存在でした。

各方面から高く評価されたテーマ

日本館では、自然素材を用いつつもいかなる様式とも無縁な建築を提示することによって、建築と自然との関係を根本から考え直すことを問いかけました。同時に、粗削りな素材の感触とそこにある一種のぬくもりが大きな安らぎを与えました。

それが海外マスコミにも大きく取り上げられ、受賞式においても「フォルムの完全さ」「来館者に大きな喜びを与えた」ことによって、卓越した功績をあげたという評価を得ることができました。

2007年4月14日から7月1日に東京オペラシティ アートギャラリーで開催された帰国展も、25,117名の来館者を数え、大好評のうちに終えることができました。



日本館内でポーズをとる藤森氏（左下）と路上観察学会のメンバー

路上シアター

展示風景（ニラハウス）

路上シアター内部

日豪交流年記念・日本現代美術紹介プロジェクト
Rapt!－20 contemporary artists from Japan

オーストラリア各地の約 20 の美術機関の協力を得て、実施されました。

このプロジェクトのテーマは、日豪の若手キュレイター同士の交流を通じて「現代の日本文化の特徴をどのように捉え、オーストラリアにおいて美術の分野でどのように提示するか」でした。そのプロセスは、1. Curatorial Exchange、2. Thinking、3. Artist-in-residence、4. Exhibition という 4 つの要素で構成され、単に現代日本の一側面を提示するのではなく、展覧会に至るプロセスそのものを重視するという、美術交流事業としては極めてユニークな事業となりました。

両国の若手キュレイター（日本3名、豪9名）が前年度よりお互いの美術環境を調査して理解を深めながら、社会学など他分野の専門家を交えた3回のセミナーを開催するなど、対話を重ねました。

そして、ブリスベン、パース、シドニー、ダーウィン、メルボルンの5都市においてアーティスト・イン・レジデンスを行い、メルボルン市内外の 10 数カ所の会場において展覧会を行いました。

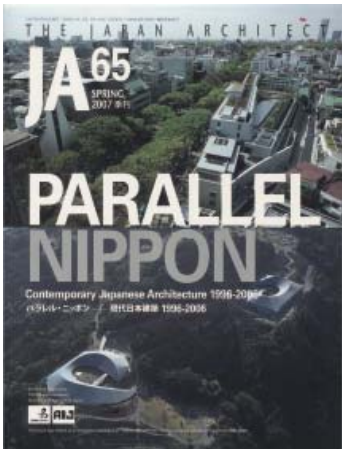
オーストラリアの社会・文化を意識した 20 名／組の日本人作家の作品は地元の美術専門家にも高い評価を受け、美術関係者にさわやかな印象を残して、好評のうちに全事業を終了することができました。

宇川直宏『Dr.Toilet's Rapt-up clinic』2006

照屋勇賢『re:order』展示風景

パラレル・ニッポン
現代日本建築展1996－2006　国内披露展

世界中の人々に身近に日本の美術・文化を体験していただくために、多くの巡回展を実施しています。2006 年には日本建築学会と共同で、過去 10 年に竣工した日本の建築 112 点を取り上げた新しい展示セットを制作しました。バブル期からポストバブル期という変動の時代にあって、時代の要求を汲みとりながらきめ細やかなデザインを提供してきた日本の建築界の実像を、社会・文化の状況と対比させながら示します。本展は 2006 年 10 月 21 日から 12 月 3 日まで、東京都写真美術館の協力により同館で国内披露展を開催しました。写真・模型とともに、海外向けに詳しく書かれた説明を熱心に読む大勢の若者の姿は、巡回開始を前に手ごたえを感じさせるものでした。2007 年より、イランを皮切りにルクセンブルク、ドイツ、イタリアと巡回します。



展覧会カタログ

第27回サンパウロ・ビエンナーレ

第 27 回を迎えたサンパウロ・ビエンナーレでは、その歴史上初めて伝統的な国別参加方式を廃し、「どのように共生するか―How to Live Together―」をテーマに、リゼッチ・ラニャード氏をチーフ・キュレイターとするキュレイター・チームが展覧会を構成しました。2006 年を通して、世界各地から講演者を招いたセミナーを実施し、また、10 名の作家をブラジルに招いて滞在制作を依頼するなど、交流的な要素を重視したビエンナーレになりました。ジャパンファウンデーションでは、ラニャード氏を日本に招いて作家選考に協力し、日本人の参加について、サンパウロ・ビエンナーレ財団と共催。日本からは、島袋道浩氏とアトリエ・ワンが出品（島袋氏は、アーティスト・イン・レジデンス・プログラムを通じて滞在制作）、また、8 月に開催されたセミナーに長谷川祐子氏が講師として参加しました。

アトリエ・ワン『モンキーウェイ』

東京国際芸術祭　中央アジア・中東の現代演劇を紹介

演劇は、私たちを取り巻く今日の世界について思いを巡らす機会を与えてくれる、貴重な媒体のひとつです。日本国内では断片的な情報をもとに語られることの多い中央アジアおよび中東について、その社会や文化に対する理解を促進するため、2007年3月、NPO法人アートネットワーク・ジャパンとの共催により、東京国際芸術祭にてウズベキスタン、チュニジア、レバノンの現代演劇を紹介しました。

ソ連解体後の中央アジアの演劇界を牽引するイルホム劇場（ウズベキスタン）は、文豪プーシキンが聖典コーランに触発されて書いた詩を原作とする『コーランに倣いて』を上演し、現代における宗教的寛容のあり方を問いかけました。中央アジアの現代演劇が日本で本格的に紹介されたのは、これが初めてです。

2004年度の初来日公演が大きな反響を呼んだファミリア・プロダクション（チュニジア）の『囚われの身体たち』は、若い教師の自爆事件を巡る友人たちやその家族の苦悩を通じて、現代のチュニジア社会を多層的に描き出しました。

ラビア・ムルエ（レバノン）は、内戦開始から現在に至るレバノン社会の傷を執拗に描く『これがぜんぶエイプリルフールだったなら、とナンシーは』を上演しました。

公演に加えて演出家のトーク、シンポジウム等を開催し、各作品の歴史的・文化的背景について理解を深めました。とくに中東について、2003年度より4年間にわたって集中的に紹介した作品は計9件に上ります。同地域の政治・社会状況を反映した批評性の高い作品群は、日本の観客に強いインパクトを与えました。

イルホム劇場（ウズベキスタン）『コーランに倣いて』日本公演のシーン　©古屋均

『囚われの身体たち』　©松嶋浩平

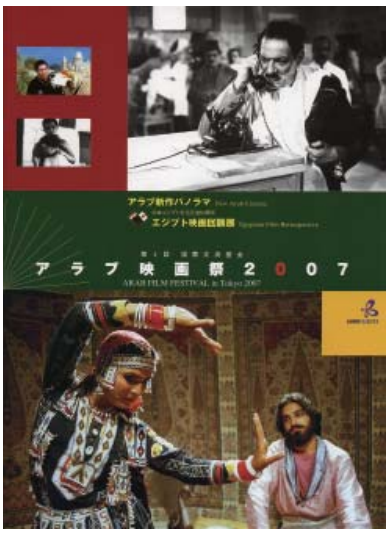
『これがぜんぶエイプリルフールだったなら、とナンシーは』　©松嶋浩平

アラブ映画祭

2007年3月9日～18日、赤坂・OAGホールで「アラブ映画祭2007」を開催しました。2005年の創始以来3回目となった今回は、日本初の「エジプト映画回顧展」（12本）と、毎年恒例の「アラブ新作パノラマ」（5本）の2部門を実施し、全日程で3,400名を超える観客を集め、週末は満員札止めの回も出るほどの盛況ぶりでした。

“アラブのハリウッド”と呼ばれる映画大国エジプトの映画史をひもとく「エジプト映画回顧展」では、エジプト文化省ならびにエジプト国立フィルムセンターの全面的協力を得て、30年代の傑作喜劇から話題の新作まで各年代の名作を一挙に上映。

一方、アラブ諸国の新作を集めた新作パノラマでは、これまで映画産業が存在しなかったサウジアラビアとイエメンからそれぞれ国産長編劇映画第1号となる『沈黙の影』（2005年）と『古きサナアの新しき日』（2005年）が出品されるなど、アラブ世界の映画状況の新たな息吹を感じることができました。



「アラブ映画祭2007」パンフレット

日本の舞台芸術を海外へ紹介

中東との集中的文化交流事業

中東との集中的文化交流事業年は3年に渡って行われ、2006年が最終年となりました。そこで、ジャパンファウンデーションは中東、アフリカに、4組の邦楽グループを派遣し、公演およびワークショップを行いました。

2006年12月4日から18日まで、セネガル、エジプト、スーダンに『は・や・と』（和太鼓）を派遣。セネガルでは、カリスマ的な存在で人間国宝である太鼓奏者ドゥドゥ・ンジャエ・ローズ氏と共演し、観客を魅了しました。

2007年1月14日から2月2日まで、イラン、カタール、バーレーン、オマーン、クウェートに派遣したのは『武士 -MUSA-』（和太鼓、津軽三味線、箏）。また、2007年2月8日から21日まで、ケニア、モザンビーク、アラブ首長国連邦に『ようそろ』（和太鼓、津軽三味線、笛、箏）を派遣しました。ケニアでは、現地在住邦人である俵貴実氏が組織するマシャリキ・オールスターズ、ルオ弦楽器ニャティティ演奏家の向山恵理子氏と共演し、両国の文化交流を図りました。さらにモザンビークでは、NGOのADPP（Ajuda de Desenvolvimento do Povo para Povo）が運営する孤児院でワークショップを行いました。

トルコ、モロッコ、アルジェリアには『和三 BOM』（和太鼓、津軽三味線、尺八）を2007年3月1日から14日まで派遣。トルコやアルジェリアでは、高校や大学を会場に、今後日本との交流の担い手となる若者を対象にしたワークショップも行いました。

この他にも世界中で、日本の文化芸術の紹介にとどまらず相互理解を深める交流も行っています。

『ようそろ』中東・アフリカ公演

『ようそろ』ケニア、ナイロビ日本人学校でのワークショップ

『は・や・と』アフリカ公演

『は・や・と』アフリカ公演

「コンドルズ」欧州公演（英国・フランス・イタリア）

日本で人気を誇るコンテンポラリーダンス・カンパニー「コンドルズ」を、2007年1月10日から25日にかけて、ロンドン、パリ、ローマの3都市に派遣しました。パリでは、パリ日本文化会館10周年記念第1弾事業として実施し、注目を集めました。

ダンサー・振付家として評価の高い近藤良平氏を中心に、学ランをまとった男性のみで結成された同グループによるダンス、映像、演劇などを縦横無尽に駆使したエネルギッシュな舞台公演は、各地のラジオや新聞などのメディアで大きく取り上げられ、各地の人々に新しい日本の現代文化のイメージを伝えました。3都市7公演は、平均99パーセントの集客率を達成し、欧州大都市における現代日本文化への関心の高まりを示す事業となりました。

パリ日本文化会館での公演　©Thomas Brémond

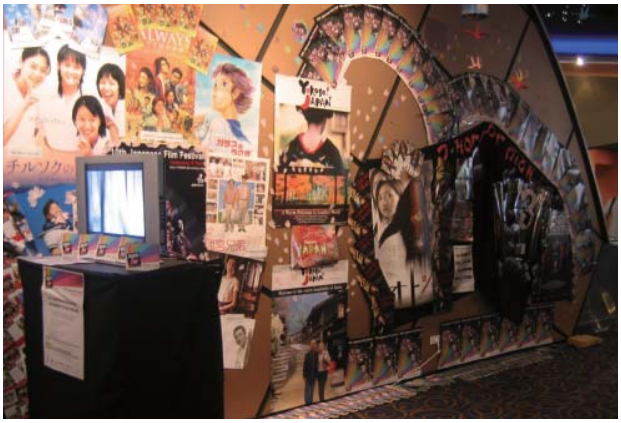
第10回オーストラリア巡回日本映画祭

友好条約締結30周年を記念した日豪交流年に、毎年高い人気を博する豪州巡回日本映画祭も第10回を迎えました。南半球の春から夏（10月～12月）にかけてメルボルン、キャンベラ、ブリスベン、シドニー、パースを巡回した映画祭では、ジャズの魅力に目覚めて奮闘する女子高生の姿が笑いと感動を誘う矢口史靖監督の『スウィングガールズ』、原爆で自分だけ生き残ったことに引け目を感じる娘の元へ戻ってくる、亡き父との束の間のふれあいを描いた故・黒木和雄監督の『父と暮せば』などを上映。

とりわけシドニーでは、各方面の協力を得て映画祭の規模を大きくし、オーストラリア・プレミア（初上映）を多数含む、19本を上映し、10日間で5,000名を動員しました。『早咲きの花』の菅原浩志監督らを招へいしての質疑応答、日豪学生映画フォーラムの開催など、双方向の文化交流の場となりました。

600席満員のオープニング

チケット完売サイン


映画祭広告

国際図書展参加

2006年5月25日から28日にかけてギリシャ・テッサロニキ市で開催された国際図書展に、在ギリシャ日本大使館および社団法人出版文化国際交流会（PACE）と共同で日本ブースを出展しました。3回目を迎える本図書展の規模は、国際的に比較すると大きいものではありませんが、42カ国から、約800の出版社や文化団体等が参加し、来場者は5万名ほどに上りました。版権商談のほか、一般市民の来場も多く、日本や日本文学に関心を持つ方が多数訪れました。日本からの出展は初めてだったことに加え、アジア諸国からの参加は日本のみだったため、日本ブースに展示した約300点の日本関係図書が来場者の大きな関心をひきました。また、現地でテレビや新聞などで日本の出展について報道され、注目を集めました。

他にも全世界で開催されている図書展へ、積極的に参加しています。

多くの来場者が訪れた日本ブース

第16回開高健記念アジア作家講演会（シンガポール）

1989年に亡くなられた開高健氏のご遺族から寄せられた寄附金をもとに、1990年より「開高健記念アジア作家講演会シリーズ」として、毎年アジアより作家、詩人、文芸評論家などの文学関係者を日本に招へいし、日本では紹介される機会の少ないアジアの文学を多くの人々に紹介しています。

2006年は、シンガポールより華人作家の丁雲（ディン・ユン）氏を招へいし、大阪国際交流センター、仙台文学館、北海道国際交流センターの協力のもと、「シンガポール華人の喪失と漂流」をテーマとして、国内4カ所にて講演会を開催しました。

マレー半島に生まれた丁雲氏は、流浪の末1987年より、東南アジアで唯一華人が多数を占める多民族国家であるシンガポールにおいて執筆活動を始め、特に21世紀以降、旺盛な執筆力で故郷、異郷、現代史、宗教など骨太なテーマの長編を次々に発表し、シンガポールの代表的な華人作家として大きな注目を集めています。華人作家の置かれている現状、また漂流し、揺れ動くことで鼓舞される自身の執筆活動について、日本の聴衆を前に熱く語られました。

入場者や各地方共催団体からも好評を得るとともに、マスコミでも大きく取り上げられました。また滞在期間中には、丁雲氏の執筆活動や文学観をめぐって、藤井省三教授（東京大学）や佐伯一麦氏（作家）との対談も行い、丁雲氏自身からも、今後、日本滞在中の経験をもとに文学作品を執筆し、本事業を通じて得た知識や情報を文壇仲間へ伝えていきたいとの積極的な意向が示されました。

大阪国際交流センターでの講演会

丁雲氏講演会のチラシ

日韓食文化交流

日本の食文化に対するより深い理解を得るために、料理と漫画という異なる分野のイベントを組み合わせて、食文化紹介事業「料理と漫画で本格的日韓食文化に親しむ」を2007年2月2日から14日にかけて韓国・ソウルにおいて実施しました。

料理イベントにはTVの料理番組で活躍中の辻調理師専門学校日本料理主任教授畑耕一郎氏と辻調理技術研究所日本料理教授川本徹也氏を派遣し、講演会に加え韓国の日本料理を専門とするトップ・シェフ40名を対象としたワークショップと試食を実施しました。講演会では、日本料理について日本人も知らないような専門的な内容を体系的かつ分かりやすくお話いただきました。また、ワークショップでは対象をシェフに絞ったことで、すし、てんぷらなどの定番メニューを超えた日本料理の奥の深さを紹介することができました。

漫画イベントでは『将太の寿司』『喰いタン』『ミスター味っ子』で韓国でも人気の料理漫画家寺沢大介氏を派遣し、一般市民を対象に韓国の人気料理漫画家ホ・ヨンマン氏との対談、上映会、原画展、サイン会等を実施しました。寺沢氏の『将太の寿司』は、韓国では主人公の「顧客本意」の姿勢が高く評価されており、韓国企業幹部の間で必読書とも言われる程の人気を博しており、同氏は各地で歓迎を受けました。

両イベントとも、多数の報道陣から取材を受け、ほぼ全ての日刊紙に記事が掲載されるなど、大きな話題を呼びました。

日本料理ワークショップ

事業を伝えるウェブサイト

アジア5カ国 若手デザイナー招へい

タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシア、インドの５カ国より、若手のファッションおよびテキスタイルデザイナー５名（→15頁）を2006年12月６日から17日まで日本に招へいし、日本のファッション・テキスタイル・デザイナーとの懇談・交流を行うとともに、日本の先端のファッション・シーンや伝統織物・染物等の視察を行いました。

また、学校法人杉野学園ドレスメーカー学院との共催および資生堂SABFAの協力により、ドレスメーカー学院の学生との合同ファッションショーを開催しました。ショーは著名デザイナー、有名メゾンの代表者、ファッション評論家らを含む約600名の観客を得て、国内外のメディアから注目を集めました。ファッションショーの開催はジャパンファウンデーション初の試みでしたが、海外事務所のネットワークを駆使して将来有望なアジアの若手デザイナーを発掘し、彼らの作品を日本に紹介する貴重な機会となりました。

５名のデザイナーは、帰国後も互いにあるいは日本の関係者と密に連絡を取り合っており、テキスタイルとファッションデザインのコラボレーションや、自国のファッションウィークに他の４名のデザイナーを招へいする機会等を模索しています。また、ドレスメーカー学院主催の「全国デザインコンテスト」への応募を自国の学生に呼びかけ、現在２名が予選を通過し、決勝に進みました。

ジャパンファウンデーションのロゴマークをモチーフに５名がデザインしたオリジナルTシャツ５種類が現在都内のミュージアム・ショップ等で販売されています。

招へいされたデザイナー　©高木あつ子

若手デザイナーによる
JFオリジナルTシャツ

芭蕉布に魅せられて

豪州多文化共生・異文化理解グループ招へい

オーストラリアのニューサウスウエールズ州多文化地域社会関係委員会（CRC NSW）で指導的な立場にいる専門家４名を1月18日から30日まで13日間にわたってお招きし、東京、仙台、名古屋でフォーラム、関係者との意見交換会、国際シンポジウムを開催し大変好評を博しました。

また、総務省を始め当該３都市などの多文化共生担当関係機関、公立学校、NPO・NGO運営の日本語学校などを精力的に訪問し、関係者と意見交換や情報交換を行いました。

日本でもグローバリゼーションの影響を受け外国人との共生が益々現実的な問題となっていることから、各訪問先ではオーストラリアが行っている多文化共生社会政策、移民（外国人）に対して行っているさまざまな生活、言語、教育などの支援活動に非常に高い関心が集まり活発な意見交換が行われました。

名古屋国際交流センターでのシンポジウム